令　和　５　年　度
千　早　赤　阪　村　立　学　校
評　価　報　告　書

学 校 名（　赤 阪 小 学 校　）
校 長 名（　蔦　亜 紀 朗　）

Ⅰ.教育目標

「のびのび　～社会を生き抜く、確かな学力作り～」
「いきいき　～豊かな心、たくましい人づくり～」
「しっかり　～魅力ある教育環境づくり～」

千早赤阪村教育大綱（第2期）・令和5年度　千早赤阪村教育方針より

本校のキャッチフレーズ

「一人ひとりが輝く元気な学校
ふるさと　赤阪小学校」

めざす子ども像

「強く」・「正しく」・「朗らかに」

元気な子　考える子　やさしい子　根気よく取り組む子
手伝う子　工夫して学ぶ子

２．経営方針

① のびのび　～社会を生き抜く、確かな学力づくり～

『生活科・総合的な学習の時間全体計画見直しと連動したカリキュラム・マネジメント』

◇基礎的な知識・技能の獲得があってこその思考・判断・表現、基礎・基本をこつこつ固める学習・生活の積み上げ。

◇児童のやりがい、児童の目的意識がある学習活動で、知識・技能を生かして思考・判断・表現する授業づくり。

◇生きて働く力を、有用感をもって生活に生かせる場づくり（行事や特別活動等）。

◇少人数、小規模のメリットを生かした教育活動を展開する、特色ある学校づくり。

『GIGA スクール構想は3年目の定着と新たな活用へ』

◇AIドリルソフト、授業支援クラウド（学習情報共有システム）も活用しながら個別最適化された学び・双方向型学習・協働的な学びを充実させ、主体的・対話的で深い学びへとつなげる。

『「ともに学び、ともに育つ」支援教育の視点を踏まえた学校づくり』

◇すべての子どもが学びやすい赤阪小学校をめざす。

◇ユニバーサルデザイン【UD】に基づく「授業づくり」と「学校環境整備」「学校体制・組織づくり」。

◇支援教育における個別の自立活動の時間確保による支援の充実。

② いきいき　～豊かな心、たくましい人づくり～

『学校教育・学校生活全般で、自ら思考・判断・表現する児童の育成』

◇相手意識をもって考え、自分の言葉で発信できる学習、体験の場の充実。

『相手意識をもち、多様性を理解しながら社会の中で自分らしく生きるための力の育成』

◇日々の授業と学校行事・学校生活とを結びつけるカリキュラム・マネジメントの推進。

③ しっかり　～魅力ある教育環境づくり～

『子どもたちにとって安全・安心な学校づくりを進める教職員』

◇子どもたちのことをより丁寧に考え、より深く連携して対応できるよう、放課後の事務や打合せ時間の確保等、教職員が心の余裕をもって働けるゆとりづくり。例年通り行うのではなく思い切って変更や廃止も打ち出して働き方改革を進める。Charge for Change!

『「地域学校協働活動」の推進』

◇「子ども育みボランティア」の発展に努め、学校と地域が協働して、学校教育における課題に取り組む体制づくりを整え、地域の力を本校教育に生かす取り組みを進め、特色ある学校づくりを進める

◇郷土である大阪府唯一の村、千早赤阪村に愛着と誇りをもつ子どもたちを育むために、歴史学習、自然、名所、旧跡に親しむなど郷土にちなんだ学習を積極的に行う。

３． 本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

		村教育方針 Ⅰ 社会を生き抜く、確かな学力づくり
P	重点目標	（1） 学習習慣の定着と言語能力の育成 ◇①思考・判断・表現力を支える基礎的な知識・技能の獲得のため、こつこつと取り組む学習・生活の積み上げを図る。 ◇②児童のやりがい、児童の目的意識がある学習活動で、知識・技能を生かして思考・判断・表現する授業づくりに取り組む。 （3） ICT 教育と情報モラル教育 **◇③**AIドリルソフト、授業支援クラウド（学習情報共有システム）も活用しながら個別最適化された学び・双方向型学習・協働的な学びを充実させ、主体的・対話的で深い学びへとつなげる。 （4） 支援教育 ◇④すべての子どもが学びやすい赤阪小学校をめざす。 ◇⑤ユニバーサルデザイン【UD】に基づく「授業づくり」と「学校環境整備」「学校体制・組織づくり」をめざす。 ◇⑥支援教育における個別の自立活動の時間確保による支援の充実を図る。
D	具体的な取り組み	◇①学期ごとに学年別に国語科と算数科の「成果と課題」の整理と「次の学期方針」をまとめて共有や掲示を行い、意識して取り組むようにした。読解ドリルや各種プリント学習の推進。 ◇②答えだけでなく考え方を視覚化する学習活動、ペアやグループ、学級全体での話し合い活動。総合的な学習の時間や課題探究的な社会科の授業を通しての研修。 ◇③授業支援クラウド（学習情報共有システム）の授業での活用。 ◇④・⑤支援教育担当作成の冊子「みんなが学びやすい赤阪小学校をめざして」の内容を共有、実践。学級実態交流会で支援教育の状況も共有。府立支援学校のオンライン及び来校・参観を含む教育相談。保護者や役場関係者、事業所との連携を図るサポート会議への参加。 ◇⑥支援学級教室での同学年、あるいは異学年での交流・合同の自立活動授業の実施。
C	自己評価／成果と課題	◇①音読重視、意見交流の機会増など取り組みの推進があった。 ◇②研修授業公開前に全体会議で事前検討する機会を今年度設けて、研修の充実を図れた。授業改善を進めたが、「4. 教育自己評価」の教職員、保護者アンケートとも、学習指導・支援に関する項目で否定的評価が他の項目と比較して多い傾向があり、課題として認識。 ◇③授業支援クラウド（学習情報共有システム） 学年により活用度合いに差があったり、積極的に活用していても効果的であったかという模索があったりした。 ◇④・⑤視覚的情報の活用や環境・ルール整備などは成果があった。保護者や外部組織との連携も個別懇談やサポート会議の実施で進めることができた。 ◇⑥なかよし教室での複数合同での自立活動で、互恵的な交流をしながらの学習機会が多く見られた。
A	次年度に向けて	◇①研修部の発案を生かしながら継続して取り組む。 ◇②事前検討→公開授業を参観しての討議の形で研修推進。 ◇③今年度試験的導入であった授業支援クラウド（学習情報共有システム）は、次年度本格的運用となるので、成果と課題を生かす。情報モラル教育として、昨年度よりも「SNS ノートおおさか」の活用が減っていたので活用を促進。 ◇④・⑤次年度新体制の中でも引き継いでいく。 ◇⑥次年度は、支援学級数や教員数の減少が予定されており、次年度の学校体制の中で、支援学級教室における合同の自立活動の場の設定を工夫したり、支援教育と通級指導の区分けと橋渡しの両方を大事にしながら、児童にとって必要で効果的な支援教育を進めたりしていく必要がある。支援教育コーディネータを要にして組織的に対応していく。

３．本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

		村教育方針 Ⅱ 豊かな心、たくましい人づくり
P	重点目標	（3） 人権教育・（5） 食育 ◇①「幅〔柔軟性〕」・「相手意識〔多様性〕」と「自尊感情」、「行ったり来たりの繰り返し〔双方向性〕」のあるコミュニケーションや思考・判断・表現活動を大切にした人権教育・食育を推進する。 （6）② 郷土学 ◇郷土である大阪府唯一の村、千早赤阪村に愛着と誇りをもつ子どもたちを育むために、歴史学習、自然、名所、旧跡に親しむなど郷土にちなんだ学習を積極的に行う。
D	具体的な取り組み内容	◇① 栄養教諭による全学年での計画的な食育授業・給食時指導を実施。わんぱく班給食での栄養教諭・栄養士による給食時指導も実施。 人権教育では、当事者から学ぶ人権学習（戦争体験者の方による平和教育）を実施。 特別活動（行事や委員会活動）では、児童のクリエイティブなアイディアを生かすことを重視し、主体性や積極性を促すことで自尊感情の高まりを意図した。 ◇② 1・2年生活科の校区探検や3年社会科での村調べ、4～6年総合的な学習の時間での村の防災や村の林業についての森林環境学習（木育）、村おこし観光企画提案などのプロジェクト学習を推進。 千早赤阪楠公史跡保存会・村教委の企画による6年生対象の今年度の「郷土学」は、上赤阪城跡へのフィールドワークを実施。
C	自己評価／成果と課題	◇① 栄養教諭による食育・給食時指導により理解したり考えたりしたことは、日々の給食喫食や食生活全体の中で、反映される部分があり、効果が見られている。当事者から学ぶ人権学習（戦争体験者の方による平和教育）は、優れた自作の視覚資料を使用してくださり、児童の理解が進んだ。行事の進行や委員会活動では、新しい企画や型どおりではない進め方なども見られ、児童が生き生きとしている姿があった。 ◇②校区や村を知る機会として充実したものになった。校外学習では、地域の方、役場や施設の方のご厚意でよい交流学習ができた。また、4年の防災の学習では、役場危機管理課から授業にお越しいただいたり、役場の施設を見学させていただいたりした。5年の森林環境学習（木育）では、村長はじめ理事者や村教委にお世話になり、千早小吹台小学校と合同で、間伐材での木工体験や村内の山林での見学や間伐作業、また製材工場の見学をさせていただき、村の魅力を実体験で知ることができた。6年の「村おこし観光企画提案」では、役場秘書企画課、村教委職員の方に助言をいただいたことを受けて、完成させたプレゼンテーションを、最後に村長・副村長・教育長、そして秘書企画課・教育課管理職に聞いていただくことができ、児童の達成感が高まった。6年生対象の「郷土学」は、座学的な内容だけにならず、上赤阪城跡へのフィールドワークを実施したことで、より具体に楠木正成が生きた時代のことやその当時の村の様子を理解することができた。
A	次年度に向けて	◇①継続して推進。平和学習については講師の方がご高齢のため、相談しながら慎重に検討。場合によっては別の企画内容も検討。 ◇②地域また関係機関のご協力をいただきながら、継続して推進。

３．本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

		村教育方針 Ⅲ 魅力ある教育環境づくり（3-1 安心安全な学校づくりの推進）
P	重点目標	（1） いじめ・虐待防止・不登校対策他 ◇①少人数、小規模のメリットを生かし、他機関と連携したきめ細やかな対応に努める。 （3） 防災教育 ◇②児童自ら、思考・判断・表現できる防災教育を推進し、有用感をもって知識を生活に生かそうとする実践意欲の向上を図る。
D	具体的な取り組み内容	◇①教育支援センター「くすのきルーム」支援員との連携。村教委・役場福祉課との連携。いじめ・不登校対応に関する校内定例会議の開催。その会議へのSSW（スクールソーシャルワーカー）の参画。個々の事例について対応。ケース会議には、必要に応じSC（スクールカウンセラー）も参加。 ◇②府事業「学校防災アドバイザー派遣事業」により防災士に来校していただき、地区別児童会や集団下校の様子、学校施設内の防災・減災対応の状況を見学した上での助言をいただいた。地震発生想定の避難訓練では緊急地震速報音源を活用、火災発生時の避難訓練では、例年と出火想定箇所を変え、児童にも状況によって判断が求められる要素を取り入れた。
C	自己評価／成果と課題	◇①望ましい形で対応できたケースがほとんどだが、中には初期対応、教職員の組織連携に課題を残したケースもあった。情報共有や課題意識をもった早期対応を、専門家の支援も生かしながら、保護者との連携のための情報提供も適切なタイミングで行いながら、進めていくことが必要である。年間数回ある村スクールカウンセラーの小学校活動日について、希望者の面談枠以外の時間帯を、いかに有効に活用するか、事前のニーズ把握や活用計画づくりが必要である。 ◇②いざというときに、教職員から指示がもし出せない状況でも、児童自ら適切に判断、行動できるようにしていく必要がある。
A	次年度に向けて	◇①今年度は定期的には行っていなかった、調整会議と呼んでいる管理職・首席・教務担当・支援教育コーディネータによる打合せを定例の週開催とし、校務や事務的な打合せ内容だけでなく、学校としての課題に対しアンテナを高くしての早めの共有の場とし、組織的な対応や支援に繋げる。 ◇②より実践的で、児童自身も「思考・判断・表現（＝行動）」が試される、防災教育や避難訓練を実施していきたい。

３．本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

		村教育方針 Ⅲ 魅力ある教育環境づくり（3-2 学校および教職員の資質向上）
P	重点目標	（2） 教職員研修の充実 ◇①村教委による研修、校内研修を通して、授業力・教員力の向上を図る。 （3） 働き方改革 ◇②子どもたちのことをより丁寧に考え、より深く連携して対応できるよう、放課後の事務や打合せ時間の確保等、教職員が心の余裕をもって働けるゆとりをつくる。例年通り行うのではなく思い切って変更や廃止も打ち出して働き方改革を進める。 （4） 地域学校協働活動 ◇③「子ども育みボランティア」活動の発展に努め、学校と地域が協働して学校教育における課題に取り組む体制づくりを整え、地域の力を本校教育に生かす取り組みを進めて、特色ある学校づくりを進める。
D	具体的な取り組み内容	◇①大学教員を講師に招いての「絵本」を使った外国語リスニング・コミュニケーションの授業作り研修、体育大学から指導者を招いての体育での対話を生かした授業づくり研修、富田林警察署から講師として署員を招いて不審者対応の実技研修を実施。読解力・活用力を高めるための授業づくりのため、先にその定着を見取るためのテストを作って、全体会議で共有してから、その力をつけるための授業づくりを逆算して行う取り組みを、今年度も実施。結果の共有会議も実施。 ◇②月例の職員会議の日の時間確保、放課後の事務時間を長く取る日として短縮5時間設定を昨年度より増やした。今年度変更（縮小）、廃止したことは少ないが、1年かけて、「どれもいい取り組みだけれども学校行事等の精選をするとしたら」という観点で次年度に向けて検討を行った。 ◇③子ども見守り隊の方々による通学見守り、家庭科のミシンを使った授業のサポート、作陶体験でのサポート、読み聞かせでのご支援。放課後の居場所づくりの一環として、校庭開放日に屋内（図書室）での遊び体験コーナーを初めて企画運営していただいた（2学期、3学期1回ずつ）。6月に子ども見守り隊代表者会議を開催。
C	自己評価／成果と課題	◇①教員が個々に受けた研修を、校内で共有したり広めたりする機会がなかなかない。 ◇②月例の職員会議の日の時間確保、放課後の事務時間を長く取る日として短縮5時間設定を昨年度よりは増やしたことで一定の効果はあったが、長時間労働の改善、休憩時間の確保はなかなか難しい。よく「スクラップ・アンド・ビルド」と言われるように、新しいことを始める際に、何かは止めたり減らしたりすることにより、容量のバランスを取ることが必要だが、新しい教育内容が増える中、どれも大事でいいことだとなかなか止める決断がしづらい面がある。 ◇③地域の皆様に大変お世話になり、年々充実してきている。いわゆる地域学校協働活動組織としての事務局を担う部分を、現在は学校職員が行っている。本来的にはそこも地域の方に委ねる形が理想ではあるが、まだ実現の構想には至っていない。
A	次年度に向けて	◇①教員が個々に受けた研修を、校内で共有したり広めたりする機会を工夫して設けていく。 ◇②教育目標・教育課題に照らして優先度を考え、精選を図る。授業時間以外でも、朝の会やそうじ時間の扱いなどについて、柔軟な実施（例 曜日によってなし）を検討していく。 ◇③引き続き、地域の皆様にご支援いただけることがあれば、ご協力をお願いする。 また、教育活動の中で学校から地域へ発信、地域へ貢献できることがあれば、積極的に行う。

		Ⅴ 予備（村教育方針「はじめに」及び Ⅰ.（2）外国語教育と異文化理解）
P	重点目標	『生活科・総合的な学習の時間全体計画見直しと連動したカリキュラム・マネジメント』 ◇①生きて働く力を、有用感をもって行事や特別活動等にも生かせるようにする。 『外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成』 ◇②必然性のある活用場面があり、指導と評価が一体化した、担任主導での授業を実践する。日常での活用機会も設ける。
D	具体的な取り組み内容	◇①生活科と総合的な学習の時間の全体計画を、夏季研修で共有して、2学期以降も実施。行事や特別活動、特に委員会活動の企画の活性化。 ◇②第2学年と第3学年で外国語活動の授業公開実施。参観した教員で授業づくりについて討議。元文部科学省教科調査官（外国語教育）の大学教員を講師に招き、村立学校教員研修として授業づくりについて学ぶ。朝の職員打合せの中で、外国語教育に関するミニ実技研修を実施。クラスルームイングリッシュ（担任が授業の中で使う英語表現）のスキルアップ。がんばりカード式チェックリストの活用。授業時間以外で昼休みなどに ALT（英語指導助手）と児童1対1の英語での対話「ラーチャレ」の実施。
C	自己評価／成果と課題	◇①マネジメントの中で、精選（継続・発展するもの、縮小・廃止するものの検討）を実施。 カリキュラムの工夫の一例として、海外（日本でも一部）実践のある「イエナプラン（イエナプラン教育）」について、生活科と総合的な学習の時間の教科特性や教育課程の趣旨と関連付けた学習会を、大学教員を招いて実施。現在、村教委と村立両小学校とで、小規模校の特性を生かした異年齢集団のグループ活動・グループ学習活動を組み入れた「イエナ風教育プラン 仮称ムラナプラン」の将来的実施の可能性を検討しており、その動きについて学校現場としての理解が進んだ。生活科・総合的な学習の時間についてはカリキュラムの整備はこの2年間で進んだが、他の教科とのリンクをより工夫していく余地がある。 ◇②大学教員を招いての学習会・授業研究は、授業者側にとっては負担もあるが、ともに真剣に学ぶ良い機会となっている。討議会や大学教員から指導助言を受ける部分での双方向性のある流れを工夫するとより良い研修機会となると考えている。クラスルームイングリッシュ（担任が授業の中で使う英語表現）のスキルアップは、外国語教育推進リーダーの教員が、毎回、内容を考え実施してきた。中には苦手意識がある教員もいるので、教員自身も楽しみながら取り組むことで、授業の良い雰囲気づくりにも繋げることができた。「ラーチャレ」の取り組みは3年めとなり、児童も随分慣れて、意欲的に取り組めている。
A	次年度に向けて	◇①生活科・総合的な学習の時間についてはカリキュラムの整備はこの2年間で進んだが、他の教科とのリンクをより工夫していく余地がある。次年度が4年に一度、教科書の改訂版が導入される年にあたるので（小学校）、新しい教科書の内容も参考に、全教科・領域のカリキュラム・マネジメントが進むようにしていきたい。また、小規模校の特性を生かし、学年合同による異年齢集団での授業を日常的に取り入れることを検討してみる。 ◇②村立小学校としては、外国語活動・外国語科を専科担当による授業実施ではなく、引き続き、学年担任が ALT（英語指導助手）と行っていく方向であるので、村外から異動してくる教員が授業をする場合でも、村立学校での授業の進め方に慣れて実践していけるよう、学校全体で村教委の指導支援も受けながら、授業研究を進めていく。討議会や大学教員から指導助言を受ける部分の流れは、教員側もより主体的な学びになるように事前の計画を工夫する。

４．教育自己評価

【教職員による評価（１月実施）】

	項　　目	肯定的評価	否定的評価
1	この学校の教育課題について、教職員で日常的によく話し合っている。	100%	0%
2	各年度の教育計画の作成に当たって、教職員でよく話しあっている。	89%	11%
3	この学校の教育活動には、他の学校にない特色がある。	89%	11%
4	様々な問題行動の防止のための早期指導に学校全体で心がけている。	89%	11%
5	教育活動全般にわたって評価を行い、次年度の計画に生かしている。	100%	0%
6	いじめ・不登校などの問題がおきた時、組織的に対応できる体制が整っている。	100%	0%
7	新学習指導要領実施、新しい教育課題への対応について積極的に研修を実施している。	100%	0%
8	各教科の指導内容について、基礎・基本を明確にし、教材、教具の工夫を行っている。	100%	0%
9	各教科等の授業において、ICT 機器の特性を生かして活用している。	89%	11%
10	教科横断的で総合的な学習に取り組んでいる。	100%	0%
11	思考力を重視した問題解決的な学習指導を行っている。	100%	0%
12	学校行事について児童にとって魅力あるものとするために、 工夫・改善を行っている。	89%	11%
13	課題別・習熟度別学習やTTによる学習指導等、個に応じた学習形態の工夫・改善を行っている。	89%	11%
14	学習が遅れがちな児童への対策を、全校的課題として取り組んでいる。	75%	25%
15	学習意欲の高い児童に対する学習指導を、個に応じた視点で 工夫して行っている。	63%	38%
16	学校運営に校長のリーダーシップが発揮されている。	100%	0%
17	校長は、教職員一人ひとりが意欲的に学校経営に参画できるようにしている。	100%	0%
18	児童のキャリア教育に学校全体で取り組んでいる。	89%	11%
19	人権問題を正しく理解し、差別や偏見のない社会をめざす主体的な生き方につながる学習となるよう工夫している。	100%	0%
20	障がい理解を深め、ユニバーサルデザインの理念に基づく社会を築く資質を養うことができるよう工夫している	100%	0%
21	体罰やハラスメントの防止をはじめ、人権尊重の姿勢にもとづいた生徒指導が行われている。	100%	0%
22	この学校では、各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している。	100%	0%
23	職員会議をはじめ各種会議が、学校運営に生かされている。	89%	11%
24	日々の教育活動における問題意識や悩みについて、気軽に相談しあえるような職場の人間関係ができている。	100%	0%
25	事故、事件、災害等に対して迅速かつ適切な対処ができるよう、役割分担が明確化されている。	100%	0%
26	施設・設備について日常的に点検や管理が行われている。	89%	11%
27	子どもたちの安全教育・安全管理を学校として計画的に行っている。	100%	0%
28	校内研修は、教育実践に役立つような内容となっている。	83%	17%
29	研修・研究に参加した成果を、他の教職員に伝える機会が設けられている。	71%	29%
30	学校内で他の教員の授業を見学する機会がよくある。	89%	11%
31	個人情報保護の観点から、児童の個人情報に関する管理システムが確立している。	100%	0%
32	中学校などとの校種間連携の機会を設け、教育活動全般に生かしている。	89%	11%
33	生活指導において、家庭や関係諸機関との緊密な連携ができている。	100%	0%

【外部アンケート等】

保護者アンケート（１月実施）の集計結果より

	項　　目	肯定的評価	否定的評価
1	子供は、楽しく学校に登校している。	93%	7%
2	学校は、教育目標や教育方針をわかりやすく伝えている。	94%	6%
3	学校は、特色ある教育活動を行っている。	91%	9%
4	学校は保護者・地域の願いに応えている。	87%	13%
5	学校での子供の学習活動・様子について、配布物や学校からの連絡、ホームページ等で知ることができる。	96%	4%
6	学校は学習のつまずきを把握し、一人ひとりの子供に応じた指導や支援をしている。	80%	20%
7	学校は豊かな心を育むための学習や体験活動にとりくんでいる。	96%	4%
8	通知表「のびる子」は、子供の学力や達成度を知るようにできている。	91%	9%
9	学校では環境、国際理解、食育、福祉、プログラミング教育等の様々な教育課題について子供に学ばせている。	87%	13%
10	学校では子供の人権を尊重する教育活動が行われている。	87%	13%
11	学校は、子供に生命を尊重する心や社会のルールを守る態度を育んでいる。	93%	7%
12	学校では防災学習、交通安全、不審者対応などの防災、安全教育について子供に学ばせている。	93%	7%
13	学校では他学年とのたてわり活動(わんぱく班)を行い、友だちを大切にする仲間作りに取り組んでいる。	96%	4%
14	学校は子供のたちの体力向上・運動についての関心を高める取り組みを行っている。	83%	17%
15	運動会、学習発表会、参観、懇談等の行事は参加しやすい。	94%	6%
16	PTAは積極的に活動している。	91%	9%
17	新型コロナウイルス感染症の5類扱い以降、学校は、感染防止や教職員の働き方改革にも配慮しながら、行事を工夫している。	94%	6%
18	学校は、地域に開かれた学校づくりのため、工夫して教育活動を行っている。	94%	6%

【アンケート結果より】（アンケート回収率は72％でした）

対象の保護者の方が年度ごとに入れ替わっていきますので、昨年度との単純比較が正確な考察とはいえない部分もございますが、②の「教育方針・教育目標の伝え方」、⑦の「豊かな心を育むための学習や体験活動」、⑪の「生命尊重・社会のルールを守る教育」、⑫の「安全教育」、⑯の「PTA活動」について、これらが昨年度より肯定的な評価が比較的増えた項目です。⑥の「一人ひとりの子どもに応じた指導や支援」、⑭の「体力向上・運動への関心を高める取り組み」については、プラス評価が減りました。どちらも学校教育の中で、大事にすべきところです。次年度の学校体制、また年間の行事や授業の計画づくりにおいて精選が必要な面もございますが、肯定的な評価を多くいただいた部分も含めアンケート結果を参考にさせていただき、重点を置くもののバランスを考えて参りたいと思います。

５．学校関係者評価

学校評議員会〔学期ごと意見聴取。集合型会議は、令和6（2024〕年2月26日に実施〕
【意見の要約】
〇わんぱく班など異年齢集団での取り組みは、小規模校ならではの良さとして充実を。
〇楽ではなくても課題克服に楽しんで取り組む意欲を。
〇柔軟性・多様性・双方向性を人間関係構築の柱に。
〇タブレット端末の活用など ICT 教育の推進を。
〇総合的な学習の時間での郷土学の充実を。
〇防災・熱中症防止など安全に関わる教育、活動を。
〇ネットトラブルの防止のための啓発を、保護者の方とともに実施してはどうか。
〇不登校支援が丁寧に行われている。
〇落ち着いた学校環境の維持をこれからも大事に。
〇管理職の連携がうまく取れている印象。教職員のチームワークは大事。
〇校長が替わっても数年単位での安定した学校運営があると安心だが、「慣れ」の部分もできてくる。常に新しい「風」「空気」に触れる機会も大切に。
〇総合的な学習の時間や学校行事では、今の赤阪小学校の子どもにつけさせたい力は何なのかを教職員でしっかりと話し合い、合意形成の下で精選を図りつつ、一層充実した取り組みを。
〇「ともに学び、ともに育つ」「相手意識をもち、多様性を理解しながら社会の中で自分らしく生きるための力の育成」をめざし、周囲の人の多様性をどう認め、そして自他を大切にするかについて学ぶ機会をより増やしてほしい。
〇宿泊行事の進捗状況を保護者へメール配信されるのは、安心できる。
〇「赤阪っ子　げんきアップ週間」における健康管理の取り組みとアウトメディアチャレンジが素晴らしい。
〇村の給食は、村独自の運営で、内容も工夫されている。子どもたちも村の給食が好きである。
〇「子ども育みボランティア」など、地域の方が授業支援や児童との交流に関わる良さがある。学校・保護者・地域のトライアングルで学校の雰囲気の良いところを共有し、良さをより生かしていってほしい。「校庭開放プラスワン」で運動場だけでなく室内で遊べる、地域交流の場ができたのも良かった。防犯・不審者対応が必要な面はあるが、「開かれた学校づくり」を大切に。
〇教職員の人数が限られている中、また教員不足の状況がある中、研修などは大事にしながらも、働き方改革（勤務環境への配慮）は進めていくとよい。
〇多様性に配慮した対応がますます求められる。相互理解がより大事になる。児童・保護者・教職員のつながり、相互のサポート関係を生かしてほしい。

６．第三者評価

第三者評価は未実施。